

## (公開学習Ⅱ)

### 第6学年2組 図画工作科学学習指導案

授業者 妻藤 純子  
図工室

#### 1 題材名 わたしの森へようこそ～流木で森の住人をつくろう

#### 2 授業構成

##### (1) 教材に対する反省と新しい提案

図画工作科（以下、図工科）の学習は、自分の表したいことを絵や立体に表す活動が学びの中心であるが、本教科における子どもの表現活動をみると、表現とそれを支える技術の間にはいろいろな課題があるように思える。特に立体表現については、平面表現と比べて、現実に制作可能かどうかといった物理的な問題や空間認識、道具の的確な選択や使用法など技術的な問題を避けては通れない上に、これらの問題を子ども自らが解決していかなければならない。このことは、「つくりたいものをつくる」ではなく「つくれるものをつくる」という実態に繋がっている。技術の欠如により表現が狭められているとしたら、獲得された技術と表現の関わりについて指導者がどう捉え、どう子どもに技術を獲得させていくかが重要となってくる。そこで、本校では昨年度から表現と技術の課題を、木工の学習を展開する中で、その解決の糸口を模索することとした。木を使った工作における技術の獲得を学習の目標に据え、子どもが主体的に技術を求めていくことができるような題材についての研究に取り組むこととなった。図工科において木工の学習は特別な題材ではない。それだけに木材は、子どもたちにとって身近な素材であると言えるが、それを自分のつくりたいものに合わせて加工していくことは、紙などの工作と比較したとき、より計画的につくる力も必要となる。また、はさみや糊といったごく身近にある道具では成しえず身体全体を使わねばならない手強さもある。

木工の題材は学年を進むごとにより計画性を増すものへとレベルを上げ、使用する木工道具についても電動式のものも取り入れられるようになる。本校の子どもたちも3年生からのこぎりや金づちなどの木工道具を使用した学習を行っているが、道具を使うことを楽しみ、技術的な力も上達してきているものの、以下のような実態が見えてきた。

- ・自分で表したいことがあっても、現時点での自分が持ち得ている技術でできる範囲の制作をしようとする。
- ・木工に対する知識や経験、技術の少なさから、こんなことはできないだろうと決めつけてしまい、つくりたいもののイメージをつくれるものへと変えてしまう。
- ・道具を使うことは好きだが、知識や技能の乏しい子は、木を扱うことに抵抗感をもつ。

以上の実態をもとに、子どもの手の内にある知識や技能だけで可能であったものづくりから、それだけではできないものづくりを通して、多様な技術の獲得と技術そのものを楽しむものづくりを体験させることが必要ではないかと考えた。自分のつくりたいものを自分の持ち得ている知識や知恵、技術などをいかしてつくるということだけでは、子どもが真に表現したいことを表現するという学習にはなり得ない。そこで、獲得してきた力を総合的に働かせるだけでなく、新しい技術との出会いやそれを乗り越える楽しさ、充足感を味わわせたものづくりはできないかと考え、その試みとして、昨年度、5年生で題材名「ワタシノ イスヲ ツクッテクダサイ」を実践した。この学習では、依頼者（高

さ10 cm程のカエルの人形)のために椅子をつくるのだが、依頼者が提示した「座りやすい」「壊れにくい」「心地よい」の3条件に合うようにつくらなければならないという課題を設定した。子どもたちは、単に自分のつくりたいものをつくるのではなく、相手を意識し自分のためではなく依頼者のためにつくるといった、デザイナーとして、そして、職人としての役割を担うことになった。依頼者からの条件を満たした椅子を制作するためには、既習の技術だけでなく、木工芸の基礎的な技術を使わなければ到底成しえない。条件を与えることで、新たな技術の必要性を子ども自らが感じ、要求せざるを得ないようにした。

本題材は、この学習を経験した子どもたちをさらに次の段階へと導くものである。今までの学習で、子どもたちはいろいろな木工芸の技術や木工道具と出会い、つくりたいものをどうすれば実際につくることができるのかを試行錯誤することで、新たな技術を獲得してきた。技術の壁を主体的に克服して6年生となった今、できないからつくりたいもの自体を実現可能なものへと変えるのではなく、自分はどう表現したいのかにこだわりをもち、試行錯誤しながら自分の表現を追求することに重点を置いた学習を展開する。主な材料として流木を選定したのは、曲面の接合という新たな技術の獲得をねらっているためである。自分らしい表現は、技術があつてこそ成り立つという捉え方をすることで、子ども自身が自分の表現に自信をもち、ものづくりの楽しさを十分に味わうことができるものと考えている。

## (2) 子どもの学びの実態と期待する学び方

本校では、3年生から5年生までの3年間、継続して木工の学習に取り組んでいる。板や枝などを材料に、のこぎりや金づちなどの道具を用いて自分のつくりたいものをつくる学習を重ねてきた。木という素材に触れ、また、道具の使い方を体験させることで、表現の幅が少しずつ広がってきている。本学年の子どもたちは、3年生から木工の学習を始め、5年生の「ワタシノ イスヲ ツクッテクダサイ」の学習では、既習の木工の技術に加えて、新しい技術との出会いを通して、木工の基礎的な技術を増やしていくことができた。その中で、木材加工の基礎的な技術である接ぎ手の手法などの初歩的な技術も見られた。自分が持ち得ている技術を超えてつくらなければならないので、制作過程で子ども自身から疑問や困難さが出てきたが、その解決策を自分自身で、また、班や学級全体で話し合うことで、克服してきた。1人の課題を全体に共有させることで、個々に取り入れられる新たな技術として蓄積することができた。全ての制作過程において、自分ではなく依頼者という他者を意識しながら制作したことは、自分の作品に対して、独りよがりではなく客観的にみる経験もできた。この椅子づくりのように、「他者を意識すること」「実用性を考えること」「物理的な実現が可能かどうか考えること」について模索することは、さらなる木工芸の基礎的な技術を獲得することへとつながった。ものづくりの立場についても、他者を意識しながらものづくりを行うデザイナーや職人から自分自らを発信するアーティストとしての立場へと意識を変えることで、自分が表したいことを実現するために自由な発想で様々な素材と向き合い、こだわりをもった制作活動になることを期待している。制作段階においては、流木という曲面の接合になるため、既習の接合方法だけでは対応しきれないと予測される。既習の技術を応用しながら新たな方法を見つけられるよう、試作コーナーを設置することで、今まで児童が扱ったことのない素材に対して、その表現方法、道具や用具の使用について個々で試すことができるようにしたい。また、知識や知恵、獲得した技術について個々のものだけに留めないで、共有する場を設定する。このことは、個から個へ、個から全体へ、全体から個へといった児童による学び合いが生まれることをねらっている。

### (3) 本時に向けての教材研究

本題材は、森の住人をテーマに制作していく。森といっても、個々に抱くイメージはそれぞれである。流木の曲がり、ねじれ、枝分かれなど人工的ではない神秘的で特徴的な形をいかせるようにするため、自宅や学校近くにあるような森だけではなく、深い森を想定する。日本の他にも、ヨーロッパや熱帯地域にある人が居住していないほど多様な木々や植物で覆われている森の写真や映像を提示することで、設定場面のイメージをつかませたい。制作においては、森に自分が迷い込んで出会った住人という設定ではなく、自分がそこに住んでいる人（主としての自分）として他者を迎える立場で制作することで、より自分自身を表現することができるのではないかと考える。つくるテーマを森の住人としているが、ここでいう住人とは、人の形のみを想定しているのではなく、動物や鳥、昆虫のような形も含むことで、多様な形態の住人の出現を期待したい。

本題材では、流木という図工の学習に初めて出会う自然物だけでなく、かんなくずや木製ビーズ、針金など様々な素材も扱う。多様な素材を扱うことで、それらの特徴のいかし方や組み合わせ方など多彩な技能が求められる。本題材は学習指導要領において、「前学年までの材料や用具などについての経験や技能を総合的にいかしてつくること」に位置づけられるが、獲得した経験や技能を単にいかしてつくるのではなく、様々な素材と向き合い、どう自己を表現するかを追求しながら制作させたいと考える。そこで、より自分らしさを表せるように、形の特徴的な流木を見立てる活動をしながら制作していく。板や角材といった人の手によって製材された木ではなく、自然の力で姿を変えてきた流木は、形や大きさが様々であるため、形や大きさからいろいろなものに見立てることができる。子どもたちは、初めて生き物としての木を素材として取り入れた学習を展開することになる。自然のものとして今まで使ったことのある小枝も準備し、必要に応じて流木と組み合わせることができるようにしておく。自然の形のもつおもしろさや素朴さを味わいながら制作していけるものと考えている。しかし、流木どうし、流木と小枝を組み合わせることは、子どもたちにとって容易なことではない。製材された木と異なり、その形状に平面はほとんどないからである。それゆえに子どもたちは安易に木工ボンドでくっつけようとはしないで、今までに獲得した木工芸の基礎的な技術を想起して、解決の糸口を探そうとするであろう。子どもたちの自由な発想をそのまま実現させるために、どんな困難さがあるか想定し、技術的な支援ができるようにしておく必要がある。

### 3 題材の目標

- ・流木の自然な形のおもしろさを感じながら、その形の特徴をいかして森の住人をつくることを楽しむ。(関心・意欲・態度)
- ・自分の想像した森の住人に合うよう、流木と他の素材との組み合わせ方を考え、つくる手順や使う道具など、制作の見通しをもつ。(発想・構想)
- ・流木の組み合わせ方や他の素材との効果的な接合方法を考えたり、木工用具を使い分けたりしながらつくる。(創造的スキル)
- ・友だちと互いに作品を紹介し合うことで、流木の見立て方や組み合わせ方のおもしろさ、接合方法の工夫に気づく。(鑑賞)

#### 4 学習計画（全9時間）

第1時 不思議の森を想像し、どんな住人として森にいたいか話し合う。

第2時 つくりたい住人に合うように流木などの材料を選び、どんな手順でつくってあげればよいか考える。

第3～8時間 住人をつくる。（本時4/9）

第9時 互いの作品を鑑賞し合い、その工夫点やよさに気づく。

#### 5 本時について

##### （1）本時目標

・選んだ流木などの形をいかし、材料の組み合わせ方や接合の仕方を工夫しながらつくる。

##### （2）準備

教師：流木、小枝、竹ひご、かんなくず、木製ビーズ、針金、シュロ縄など。

のこぎり、金づち、きり、手動ドリル、電動ドリル、木工やすり、クランプなど。

児童：木工用ボンド

##### （3）本時の展開（○教師の意図 ◇全体への支援 ◆個への支援）

学習活動	教師の意図・支援
<p>1 どんな住人をつくろうとしているのか紹介し合う。</p> <p>2 制作する上で困りそうなことや迷っていることを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・流木が硬くてくぎを打つのがたいへんそう。他の方法はないかな。</li> <li>・曲面どうしをつなぎ合わせるにはどうしたらいいのかな。</li> <li>・5年生の時、きりで穴をあけて差し込むと丈夫にくっつけることができたよ。</li> <li>・針金で接合させると、曲げることができるよ。</li> </ul>	<p>○どんな住人をつくろうとしているのかを伝え合うことで、互いの活動を知るとともに、今後の制作の見通しをもたせたい。</p> <p>○流木や他の材料をどういかにするか発表させることで、材料の形を意識し、意図をもった制作になるようにしたい。</p> <p>◆見立てがなかなかできない児童に対しては、友だちの考えを聞いたり活動を見たりさせる。</p> <p>○今日の制作において、予想される困難や問題点を発言させ、個々の問題を全体の課題として共有させ、予想される解決策について話し合うことで、自分で解決するための糸口になるようにする。</p> <p>◇今までに子どもたちが、どんな道具を使ってどう加工していったかを板書に示すことで、困ったときの参考にできるようにしておく。</p>
<p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">材料の形をいかし、組み合わせ方やくっつけ方を考えながら、森の住人をつくろう。</p> <p>3 森の住人をつくる。</p>	<p>◇森の写真や本をいつでも見ることができるようになることで、考えを広げたり深めたりできるようにする。</p> <p>◇組み合わせ方や接合の仕方を参考にできるように参考作品を複数提示するとともに、前時までの学習で見つ</p>

4 今日の学習を振り返る。

けた流木の組み合わせ方や接合の仕方などを掲示することで、困ったときのヒントとなるようにする。

○材料のいかし方や工夫していることなどを随時板書し、参考にできるようにする。

◆曲面をどう組み合わせ、接合していくかなど制作過程で困っている児童には、困っていることを全体に伝えることで、全体の課題として共有し、友だちと知恵を出し合いながらその解決策を見つけられるようにしたい。

◆接合時にどんな材料や道具を使えばよいかなど、自分の考えたことを試すことができるコーナーを設置することで、自分の考えを確かめながら制作できるようにする。

○自分の住人を見せながら、材料のいかし方や接合の仕方など技術的に工夫したこと、次時の活動の予定を伝え合い、互いの活動のよさに気づいたり、今後の活動の参考となるようにしたりする。

○現時点で困っていることを発言させ、みんなでその解決法を考えることで、意欲と見通しをもって次の学習に臨めるようにしたい。